



# ひよく たびね 比翼の束

## 第七十六回 ひとりごと

比叡山延暦寺の宿坊に着いたのは午後4時を過ぎていた。

今にも雨が降り出しそうで、うっそうと茂る杉並木と夕暮れの暗闇で紅葉の色もかき消されていた。

延暦寺への一人旅は2度目である。最初に訪れたのは、4年前のちょうどこの時期であった。

思いおこすと、あの時も重大な決意を迫られていた。

さまざまな試練に耐え、それに打ち勝つ気力と覚悟が求められていた。

いろいろと思い悩み、思考をめぐらしたが、そう簡単に結論を導き出せるものではなかった。

あの時の日記帳には、「克己利他」という文字と、「労惜しむことなきをただ貫き、市長として来し方7年あまり」と記されている。

心静に自分をみつめ、現在の心境をしっかりと確認するための比叡山延暦寺への一人旅であった。

そして再び、総本堂根本中堂での朝の勤め、僧侶の読経と法話に心を静め、これまでの自分を振り返っている。

一つの壁を超えたかと思うと、休む間もなく次からつぎへと目の前に新たな壁が立ち塞がり、この連続であった。

その都度、常に的確な判断と決断が求められ、そのためにさまざまな知識と豊富な経験が必要であり、課題に立ち向う強固な意志と熱意がなければ、さまざまな困難や批判に打ち勝って信念を貫くことはできないことを思い知らされてきた。

再び、この延暦寺を訪ね、雨の降りしきる中、早朝の静寂な暗い経堂で読経を聞きながら、これまでの自分を見つめ直している。

青年時代、阿部次郎の三太郎の日記を読み、そして学生時代にはキルケゴールやサルトルなどの実存哲学を読みふけた。

年を重ねて、これまで過ぎ去った日々の一つひとつを思いおこし、限りなく後悔の念にさいなま

れていることは、確実に人生の終末に近づきつつあることのアカシなのかもしれない。

最近はとくに意地を張り、強情になっていることを自らも自覚する。

なぜなのか、生きざまとして自らの信念を貫こうとするからなのであろうか。

少年時代に受けた父の厳しさ母のやさしさなど、生い立ちそのものが今の自分を形づくっていることに気付くのである。

こだわりを棄ててしまえばいいのだが、それができず、寛容さをもって人の心を見つめつづけられる人間でなければならないと、思うことしきりである。

人が生きていくということは、常にあれかこれかの選択の岐路に立たされることである。

さまざまなできごととどう対処すればいいのか、迷いが伴い、判断に苦しむけれども、最後は自分の判断であるし、自分がどう生き抜くかの覚悟に関わっているのであろう。

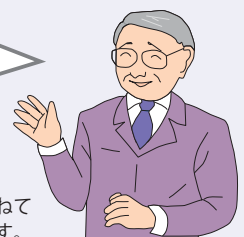
自ら選んだ決断は、自らの責任を負わなければならないのである。

連日多忙な日を過ごし、時間の流れに追いつまられ、自らの存在を意識できなくなってしまうようなそんな日々の中で、これでいいのだろうか、私の生き方はこれで間違いのないのだろうか、と不安がつゆる・・・

この一人旅は、自らを静かに顧み、心の整理をするそんな時を過ごすことができたような気がする。

矢板市長 遠藤 忠

私（市長）の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。